

第一期 第七十五号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2022. 10. 20 定有堂書店 発行

独学孤陋

奈良 敏行

ずっと満足しないために
あつちとこつち日記

ワクサカソウヘイ
鳥居 貴彦

現代思想の「現代」とはいつのこと？

岩田 直樹

汽水のほとりから (19)

小原 修治

自衛隊「サンダーバード化」計画

萩原 俊郎

グリーンフケアをめぐるって 1

松田 裕史

弱さの再構築 ぐ地べた目線のススメ

芝野 浩貴

だんだんばなし

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その七十四

内田 克彦

八代日記 (三十一)

齊藤 仁昭

蝶々夫人と下駄

秦阜 梅林

迷える人、ひとり

三浦 永理

鮭

あぎの素生

はなうたアンコール

ドラマメリア

…… 編集後記

独学孤陋

奈良 敏行

(定有堂 店主)

最近コロナ禍のせいで、「独学」という言葉をよく目にするようになって、この言葉が気になり始めた。「学び系」と「独学」の重なり具合について、結論の出ない考えがふつと湧き出している。

先日見知らぬ青年が、定有堂の文庫カバーを付けた『どこでもいいからどこかへ行きたい』(Pia)を手にして、「この本を読み終えたのですが次はどの本を読んだらいいですか?」と声をかけてきた。入り口近くの、面陳文庫のお薦めコーナーの一冊だったので、その二十冊ほどを前にして雑談した。結局『はたらかないで、たらふく食べたい』(栗原康)と『現実脱出論』(坂口恭平)を買って帰った。いずれも即答解決の本ではない。むしろますます分からなくするのではないだろうか。最初の本もそうだが、「分からない」という事柄との出会いが、次の読書を求めるのだと思う。暮らしの日常の中で、分かりやすい結論を

掃き捨てることのくり返しの中で、知らぬ間に次の形態へと変化していく。本屋にある本からの「学び」、これも「独学」のひとつの姿だと思えてきた。

学びに二重性があるのだろうか。『ハマータウンの野郎ども』（ちくま文庫）という本がある。この本は久しく品切が続いていた。春近くに新古書店で見つけライン引きだったが小躍りして購入した。読み終わって気がついたが前年に重版されていた。むろん急ぎ数十冊仕入れ手配した。その後この九月に版元の人とランチする機会がありそんな笑い話をした。「やはりブレイデイみかさんの影響ですよね」と聞いたなら「え? 『100分の1名著』で取り上げられたからですよ」という返事だった。ブルデューの文化資本による階級格差を論じたもので、確かにタイムリーなものではあった。でも少し肩すかしだった。

この本は、わたしのこだわる「学び系」と「独学」を考えるのに、欠かせない本だ。指導理念に画一化された学校文化を分析してみせる。「地べた」というのは、身の丈の世界（働きの場）と、そこから見える世界のことだが、その「地べた」の側に生きる若者に寄り添った分析だ。著者のポール・ウイリスはいう。「少年たちは、自分自身を抑圧することになる教室のメカニズムへの加担を拒んでいゝ」、つまり「能力主義競争の拒絶」だと。そこを訳者の

山田潤は元定時制高校の教諭でもあり、エッセンスをつかんで簡潔に解説している。

「競争に加わるということは、その結果として与えられる序列を受け入れるということにとどまらず、競争のそもその前提にある、ゴール＝価値尺度をみずからのものとして内面化するということなのだ。」

学校は規律や階級意識を内面化するというのだ。学校の学びは達成度を試される。集団の中で判定され位置づけられる。競争選別でない「地べた」の学びというものがあるのだろうか。

『ハマータウンの野郎ども』は、学校文化になじめない若者を、「インフォーマルな集団」と概念化している。ここには解決にいたらないかもしれないアポリア・難問がある。「インフォーマルな集団に加わると、ひとは人生の見えない裏側を感知するようになる。……いわば二重透視の能力を身につけるようになる」。学校文化に違和感なくそのまま社会に出て行く人もいる。しかし二重透視にさらされる人もいる。最前の青年は、「現実脱出」「はたらかない」のコーナーに、一つの透視力を見出した。この選択は興味深い。独学は評価を求めてはならない。反学校文化の若者は労働社会の現場に学ぶ。教科書のない生活者たちの世界だ。共感するところは多いが、しかし、わたしは独

学することは本を読むことだ、としか思いつかなかった。そしていまもそうだ。難問というのはここに結論はないということだ。

整理整頓された思考の技法に巻き込まれるのは好きではない。結果にとられると結論に支配される。手助けを求めると人の通念にとり込まれる。

二重透視と関わりなく、ただ本を読むことにしか興味は持てない。結論の出ない勝手なことばかり述べるが、学ばず学ぶというストリート(往来)の生き方に執着し続ける。本屋は路上(地べた)に生き方を探す小商いなのだ。評価を人に委ねてはならない、ということも思う。

2022.09.21

Porta『ユ』でもいいからどこかへ行きたい』幻冬舎文庫 2020

栗原康『はたらかないで、たらふく食べたい 増補版』ちくま文庫 2021

坂口恭平『現実脱出論 増補版』ちくま文庫 2020

ポール・E. ウィリス 『ハマータウンの野郎ども』ちくま学術文庫 1996

岸政彦『ブルデュー「ディスタンクシオン」』NHK 100分

Porta『ユ』でもいいからどこかへ行きたい』幻冬舎文庫 2020

寄贈本。内野泰彦『図書館人への言葉のとびら』郵研社。出版と図書館に関する言葉のエッセンス集。鳥取からは高多彬臣さん永井伸和さんなどの珠玉のことが登場。

定有堂教室「(仮称)ドウルーズを読む会」
(講師) 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授

太極拳教室(会場 定有堂二階) 葉香クラブ(荷葉)
毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から
講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

定有堂教室「読む会」(岩田直樹氏 選書)
毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

ずっと満足しないために

— 新刊『出セイカツ記』について

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

10月24日に新刊『出セイカツ記』を河出書房新社より上梓する。連載を通じて、約六年をかけて書いた。きつと定有堂さんでも取り扱ってもらえるはずなので、是非手に取っていただければ幸いである。

本書のジャンルは何かと問われれば、エッセイであり、ルポであり、生活誌であり、そしてなによりも冒険記である。

「これをやれば満足するだろう」ではなく、「これだけはいくらやっても満足しないだろう」というものを見繕って、それを指針にプロジェクトを組むことを生きる道としている。私にとつてのそれは果たして、「自然科学」「コメント」、そして「愉快な冒険を書くこと」の三つであった。

なにせ生まれながらの飽き性である。自分を満足させる方向で歩くと、きつとその先には無為が待っている。だつたら、やり続けてもいつまでも満足しないものを追ったほ

うが、色々都合がよい。

新刊『出セイカツ記』には『衣食住という不安からの逃避行』というサブタイトルが添付されている。生活の中における「いつか食い詰めるんじゃないか」「いつか路頭に迷うんじゃないか」などといった不安、それを滅却するための術を探すため、石を拾って売ってみたい、磯で暮らしてみたり、自宅内をジャングルにしてみたり、布団の中で約一年間「何もしない」を実践してみたり、そういう一畳間の冒険を綴った書なのである。

そこには「自然科学」「コメント」「愉快な冒険を書くこと」の三つの要素がすべて入っている。これまで様々な書籍をしたためてきたが、ようやく一旦の集大成を刊行することができそうだ。そしてもちろん、私は満たされたりはしていない。来年はどんな集大成を作ろうか、それをすでに考え出していたりする。満足しないことがあるというのは、ありがたいことなのである。

『出セイカツ記』の帯コメントは、高野秀行氏、山極壽一氏、吉本ばなな氏という錚々たる方々からいただくことができた。どなたも敬愛する「冒険者」である。

山極壽一氏のジャングルから人間文明を読み解く眼差しや、吉本ばなな氏の小さなものの中に大きなスケールを

見つける感覚、それらは私がアドベンチャーを描く際の重要なコンパスとしてインストールされている。先人は偉大なり、である。

そして、高野秀行氏。

思えば、高野秀行氏がいたから、私は自分にとっての「いくらやっても満足しないもの」を見つけられたのだ。たとえば高野氏の名作『怪魚ウモツカ格闘記 インドへの道』は、若き日の自分に計り知れない衝撃をもたらした。そこには「愉快な冒険を書くこと」に対する真摯な姿勢が密度をもって示されており、さらに「自然科学」の面白さ、加えて「コント」的な手法をも孕んでいる一冊だったのである。そうか、私はこういうものを編みたいのだ、こういうことをやればきつと満足しないままに死ぬるのだ、と読後に震えた。

自分の人生を正しく狂わせてくれた御三方にコメントをいただけたことで、ようやく『出セイカツ記』は陽の目を迎える。

装丁は川名潤氏、表紙イラストは堀道広氏と、デザイン面もまた豪快である。本書が『聖書』のパロディをやっている向きがあることから、私がモーゼのごとく大海を割っている様子が表紙に描かれている。これは編集を担当してくれた辻陽介氏と辻純平氏のアイデアが強く反映されて

いる。

連載時のタイトルは『エクソダス・フロム・イシヨクジュー』だった。「エクソダス」という言葉には、移動や移住や出奔、そして『出エジプト記』という意味があるという。言わずもがなだが、『出エジプト記』は本書タイトルのネタ元である。

移動や移住とは、満足しないことを選んだ者たちの切り札だ。私たちはきつと、満足しないということを決めて、遠きアフリカの地からここまで旅をしてきたのだろう、なんて思ったりしている。

なんだか不安がどんどん蓄積されていく世の中である。いま立っている場所から少しだけ出奔して、不安で満たされないための旅を始めるにはどうしたよいか。満足されないことで満たされていくには、どうしたらよいか。そのガイド本としても書いたつもり『出セイカツ記』である。浅はかな動機から始まるディーブな生活冒険記を、是非楽しんでいただければ幸いだ。

(編集部 注)

ワクサカソウヘイ『ふぎける力』コア新書 2015

ワクサカソウヘイ『出セイカツ記』(仮) 河出書房新社

2022. 10. 24 (予定)

あつちと「」つち日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

友達を見つけて店の前に飛び出し出していった子どもを見送る。と、思ったらもうなにかモメる声が聞こえてくる。四歳児にはいさかいが絶えない。なんのルールもないボール遊びでさえすぐにケンカが発生する。どちらにも言い分がある。どちらかが泣き、もう一方はすねる。それでも遊びが終わるわけではない。なんとなく距離は縮まり、数秒後にはまた一緒になって駆け回っている。なんとなく、なめらかに修復される関係。大人が入る余地はない。

いまこの文章を書きながら座っているレジ、というか番台から見える位置に、『とこのはたけと、うたれちゃったしか』という本が見えている。書いたのは「IねんIくみはたけやまなぎ」。小学一年生の著者が書いた作文を絵本に仕立てた一冊だ。父の畑を手伝うなぎくんがワナ

にかかった鹿の死を目の前にして思ったこと。校正されていない文章からはストリートな感情がぶつかってくる。本をひっくり返してうしろからめくると、おじいちゃんである畠山重篤さんのエッセイが始まる。自然に囲まれて育った祖父の思い出が詰まった文章。絵本の巻末に長いエッセイ、というのはたまにみる本の構成だ。ほとんどの場合、別々の本にしたらいのにな、という感想しか出てこない。長すぎる説明書きは絵本の余韻を消してしまう。細かい文字を読むのに絵本の大きな判型はしっくりこない。両方のいいところを混じり合わせることはむずかしい。『とこのはたけと、うたれちゃったしか』には絵本とエッセイの間に「凧」という題のついた短い文章が挟まっている。小学一年生が野山を走りまわる景色が見えてくる。見守るおじいちゃんの目線と絵本の余韻。この文章があつてよかった。

腰のまがつたおばあさんが二冊の本を持ってやってきた。図書館のシールが貼つてある。「この本買いたいんやけど聞いてみてくれへん？」と言う。ああ、ちよつと待つてくださいね、と出版社に本を注文する。その前に念のため、版元のホームページをのぞく。在庫の情報が書いてある時がたまにある。ついでに電話かファックス以外の注文方

法がないかも見てみる。が、だいたいどちらとも書いていない。うちにはファックスがないので電話をかける。本のタイトルを伝えると電話の向こうでぱちぱちとパソコンを叩く音。こちらでもパソコンの画面をぼーっと見ている。こちらのパソコンとあっちのパソコンは繋がっているはずだ。ワールド・ワイド・ウェブ。でもわざわざ二人の人間が間に入って電話をしている。二人ともパソコンの画面しか見えない。滑稽な時間。突然「在庫ゴザイマスノデ番線コードヲドウゾー」と早口でまくしたてられる。こちらも機械的に必要なことを言う。「デハ〇日ノ搬入デスー。ヨロシクオネガイシマスー」と、電話は切れる。ありがとう、と言われることはほとんどない。本が届き、請求され、お金を払う。そのお金で出版社の人たちは生活している。電話でめんどくさそうに対応しているあの人の給料もそこから出ている、はずだ。しかしお礼を言われることはほとんどない。別にお金を払っていることが偉いとは思わない。千円ちよつとの本一冊で感謝されたいわけではない。なぜか残る違和感。電話を切るといつも少し疲れている。二人の人間がわざわざ手を動かして本を届けようとしている。そのことをよかつたと思いたい。

後は「にんげんとしかがなかよくなつたらいいです。」という一文で締められている。にんげんとにんげんもなかよくなつたらいいです、とふと思つたが別に仲良くななくてもいいか、と思ひ直した。せめてもう少しだけなめらかな血の通つたものになつたらいいです。にんげんとにんげんのかんけいが。

「開風社 待賢ブックセンター」

京都市上京区大宮通樺木町上る菱屋町8-18

『ことのはたけと、うたれちやつたしか』の作文の最

現代思想の「現代」とはいつの「現代」か？

岩田 直樹 (公立鳥取環境大学特任教授・

「読む会」選書人)

「流行りものが嫌い」というわけではないが、普段ベストセラーを読むことはほとんどない。千葉雅也(一九七八年生れ)の『現代思想入門』(講談社現代新書、三月刊)が発売後一ヶ月で七万部売れたというので、年度末・年度始めの忙しさが少し落ち着いた五月に読んでみた。

概念の脱構築(デリダ)、存在の脱構築(ドゥルーズ)、社会の脱構築(フーコー)を手際よく概説し、ニーチェ、フロイト、マルクス、ラカン、ルジャンドル(読んでくことがない)らの思想、ポスト・ポスト構造主義などについてコンパクトにエッセンスを取り出す語り口に接すると、「こんな講義を受けてみたいな」と思ってしまう。准教授として在籍する立命館大学文学部の講義「ヨーロッパ現代思想」をベースにしているという。

その二ヶ月後、朝日新聞読書欄「売れてる本」に、松本卓也(精神科医)の書評が掲載された(七月二日付)。松本は、「『構造と力』以来の快作」であり「かつて現代思想を「チャート式」に解説した浅田彰の本の後継の位置を確たるものとしつつあるように思う」と絶賛する。

「実際、大学のキャンパスには、往時のように見せびらかしながら闊歩はしなくとも、『現代思想入門』をカバンに忍ばせて歩く学生が確実にいるのだ」というのはさすがに言い過ぎだろう。それにしても、ギリ貧の出版業界でこんなにも思想書が売れる(七月時点で四刷八万部、電子版一万部)ことは慶賀に堪えない。

浅田彰(一九五七年生れ)が『構造と力』を江湖に問うた一九八三年、ちょうど私は大学生だった。この本を周囲の学生たちはよく読んでいたものだ……。

拙稿の展開では、こんなふうにはその頃の様子を回顧するのが自然だろう。ところが、当時の私は物理系の学生で、『構造と力』を書店で手に取ったことすらない。「見せびらかしながら闊歩」する姿を見たこともない。

大昔の本が取り上げられるのが不思議だったので、『構造と力』記号論を超えて『勁草書房、一九八三年初版二〇二二年五八刷』を読んでみた。「チャート式参考書のように明快に、そして、軽くスピーディーに書くことを心がけた」(あとがき)とあるように、とても簡潔にまとめられている。付表「プレモダン、モダン、ポストモダン(理想的極限としての)」(二二六頁)に目を通すだけでも、浅田の力量の高さ、本書の価値がよくわかる。

(Z世代のために蛇足を一つ。「チャート式」とは数研

出版の参考書。前世紀後半は参考書の代名詞だった。私が三月まで所属していた高校数学業界では、その後、東京書籍や啓林館の参考書が台頭し、「チャート式」の覇権が脅かされている。「チャート式」と聞いてもピンと来ない若い世代は多いと推測される。）

日本の思想界で、浅田彰に続くスターは誰だろうか。東浩紀（一九七一年生れ）と千葉雅也が即座に思いつく。

乗りかかった舟だから、東『存在論的、郵便的―ジャック・デリダについて』（新潮社、一九九八年初版、二〇二二年二刷）、千葉『動きすぎてはいけない―ジル・ドゥルーズ』（二〇一三年、河出文庫、二〇一七年初版）を刊行順に読む。

『構造と力』が「現代」思想全般を独自の解釈でみごとに剔抉していくのに対して、『存在論的』、『動きすぎては』はそれぞれ「一点突破」的なデリダ論、ドゥルーズ論である（「全面展開」の手前に留まる）。『構造と力』は一般向けであるのに対して、『存在論的』、『動きすぎては』は博士論文であり、とにかく難しい。

これらの著作には共通点がある。著者たちの初の単著で、いずれも三〇歳前後の若書きである（浅田二六歳、東二七歳、千葉三五歳。千葉はパリ大学・高等師範学校への留学、国内大学非常勤講師を務めるなど博士論文提出に時間がか

かっている。）もう一つの重要かつ残念な共通点は、三、九人とも第二の主著が現れていないことである。

三冊を読み終えて、ふと疑問を抱く。現代思想の「現代」とはいつのことなのか、と。

一九八〇年代後半、文系に「転向」した私がよく読んでいたのはフッサール（一九三八年没）やメルロ・ポンティ（一九六一年没）であり、「現代」思想ではなかった。「現代」思想家とは、構造主義のレヴィ・ストロース（一九〇八年―二〇〇九年）、フーコー（一九二六―一九八〇年）、ポスト構造主義のデリダ（一九三〇―二〇〇四年）、ドゥルーズ（一九二五―一九九五年）らであった。

主著の刊行年を並べてみると意外な発見がある。レヴィ・ストロース『野生の思考』一九六二年、フーコー『言葉と物』一九六六年、デリダ『エクリチュールと差異』一九六七年、ドゥルーズ『差異と反復』一九六八年。フーコー、デリダ、ドゥルーズは大戦間生れの同世代である。四人とも主著刊行は半世紀以上も前である。二〇二二年の今、「現代」思想と呼ぶには大いに抵抗がある。

浅田（一九八三年）―東（一九九八年）―千葉（二〇一三年）―？（？年）。日本思想界の新たな旗手は、この調子？だと二〇二八年に「デビュー」しそうだ。そのとき、「現代」思想とはいったい誰の思想を指すのだろうか。

汽水のほとりから (19)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

東京のTVディレクターが番組制作のために田舎町の読書会を取材するなんて、めったにないことに違いない。でも、先月そんなことが起きた。場所は、松崎の汽水空港。モリテツヤ君が営む小さな本屋である。同じ松崎に昨年夏オープンしたJig Theaterという小さな映画館で、経営者の若い夫婦が『ドライブ・マイ・カー』で米アカデミー賞を受賞した直後の濱口竜介監督を招いたイベントを催した時、心底驚いたが、この話も俄かには信じられなかった。今回TVディレクターのKさんが取材に訪れた理由は、二つあったようだ。一つめは、今回の読書会が真木悠介の『気流の鳴る音』（ちくま学芸文庫）を読んでいたこと。二つめは、その会場が汽水空港であったことである。一体どういうことか。順を追って、分かりやすく説明しよう。一つめについては、Kさんは大学で社会学者見田宗介のゼミ生だった人で、見田先生が今春亡くなられたので、退

職前の最後の仕事として恩師の追悼番組を作りたいと、その素材を探していたという背景があった。本誌前々号にも書いたが、『気流が鳴る音』の著者の真木悠介は、実は見田宗介のペンネームである。この本の副題は「交響するコミュニケーション」だが、そこに如何にコミュニケーションを構想するかという社会学者としての問題意識が伺われる。

とはいえ、これだけの理由で遠路遙々来るはずもない。だから理由としては、二つめの会場が汽水空港だったことの方が大きい。これも以前に書いたことだが、汽水空港のルートと言える気流舎という小さな本屋が東京の下北沢にある。その外装から内装まで全て手掛けた加藤賢一さんという伝説の店主がいて、モリテツヤ君はここに通うことで本屋になる夢を育んだという。もつとも店主からは何度も「本屋は儲からないからやめておけ」と忠告されていた。加藤さん自身、開店から五年目に店を人に預け、瀬戸内海の島へ移住する。それはともかく、その加藤さんが気流舎を開店するきっかけを作った一人がKさんだったらしい。Kさんにとつての加藤さんはいつも気になる存在であり、同様にその弟子たるモリ君の存在も以前から気になっていたらしい。今回の取材は、それを確かめる旅でもあった。六年前、僕はその気流舎を一度だけ訪ねたことがある。思い起こすのは、店主が座るカウンター台の正面の書棚

に装丁が見えるようスタンドに立てかけた函入り単行本の『氣流が鳴る音』が置かれていたことである。思わず本を手にとって函から出し、おもむろに表紙を開くと、氣流舎に足を運んだことを記す著者の直筆サインが目に入った。売り物かどうか店番をしている男の人に尋ねると、それはこの店の宝で、サインは見田さんが来店した折に、店主の加藤さんが頼んだという。加藤さんは『氣流の鳴る音』が大好きで、氣流舎という店名も、その書名に由来している。

この話を聞いた時は、見田宗介が偶然店に入ってきたと思っただけ、今から考えると、それは彼のゼミ生でもあり、店主の加藤さんとも知り合いであつたKさんのお膳立てがあつたのだろう。氣流舎ではKさんは或るコードネームで呼ばれていたらしいが、モリ君は当時よく耳にしたその謎の人物が実は目の前のKさんだと知って、驚いていた。

読書会の間ずっとKさんはカメラを回し続けていたが、最後に個人的にとても大好きな見田先生の文章があると、我々に教えてくれた。それは竹内敏晴『ことばが劈(ひら)かれるとき』(ちくま文庫)の解説として書かれたものだ。これは『氣流の鳴る音』を読む上でも必読の文献だろう。次のような一節がある。やや長いけれども、引用したい。「〈言葉〉をとおして人間は変えていくことができる。世界も変えていくことができるという、「戦後民主主義」の

理念の否定から七〇年代は出発していた。言葉を否定する青年たちは世界を変える方法として、〈暴力〉を信じようとした。けれど暴力は、暴力それじたいとしては、最も強力な暴力である国家暴力のまえに必ず敗れる他はなただけでなく、連合赤軍の自壊のように、内部の荒廃を必ず帰結するということをもまた、七〇年代前半は、息をつぐ間も与えない速度で立証しつくした。言葉によつて世界を変えることはできない。暴力によつて世界を変えることはできない。どうすればいいか。(中略)七三年から五年にかけて、インドとメキシコへの旅は、わたしにとつて、自分の身体の細胞が、すみずみまで入れかわるような旅だつた。帰つてきたとき、それでもわたしは、解放の具体的な方法というものを、なにももたなかつた。ただ具体的な方法を、すつと受け入れる身体にだけなつていた。(後略)―

『氣流の鳴る音』のテーマもまた、ここに言うような、どうすれば人間は変わることができるのか、にある。そうKさんは伝えたかつたのだろう。「交響するコミュニケーション」個の多様化する共同体は、その彼方に構想されるのだ。

自衛隊「サンダーバード化」計画

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

「何をしてもいいし、何もしくなくていい」というのが定年後のライフスタイルだ。ユーチューブで小学生のころ夢中になった『サンダーバード』（英国のジェリー・アンダーソンが制作した『国際救助隊』が主人公の特撮SF人形劇）日本ではNHKで1966～67年放映）を見つけて一日中観ていたら、うたた寝しながらこんな夢を見た。

◇ ◇ ◇
中国四千年の歴史が生んだ故事熟語は、時空を超えて真実を突いているものが多い。たとえば「矛盾」。日本人なら小学生でも知っている。

「楚の国に矛（ほこ）と盾（たて）を売る商人がいて、『この矛はどんな盾をも貫き、この盾はどんな矛も通さない』と自慢したが、『では、その矛でその盾を突いたら、どうなるか』と客に問われ、返答に窮した」（韓非子）。転

じて、ものごとのつじつまが合わないこと。

この熟語から私はいつも「現代の軍事バランス」を連想する。強力な攻撃能力（矛）を開発すれば、相手はその攻撃から身を守る防衛網（盾）を築き、そうなればさらにそれを上回る攻撃能力を身につける…小学生でも「意味ないじゃん」と分かる不毛の連鎖を、世界の主要国首脳は近代から何世紀もの間続けてきた。

◇ ◇ ◇
ロシアによるウクライナ侵攻で、ヨーロッパのいくつかの国が「GDP（国内総生産）比2%を防衛費に」という方針を打ち出し、便乗する形で日本でも「5年後をめどに現在GDP比1%弱の防衛費の倍増を」という主張が浮上している。

だが、日本の自衛隊はすでに「世界軍力ランキング」で米、中、露、印に次いで第5位。防衛費は世界第9位だが、これをGDP比2%に約十一兆円に増やすと、たちまち米、中に次ぐ第3位になる。つまり、近ごろ元気がないとはいえ日本はまだ世界第3位の経済大国、他とはGDPの「分母」がけた違いに大きいのだ。

こうした数字が一人歩きした防衛力強化は、中国や北朝鮮、さらに韓国にも軍拡の口実を与え、アジアに先ほどの「矛と盾による不毛の連鎖」を招いてしまう。

グリーンフケアをめぐる

I

松田 裕史

(高校教員)

岡山のスロウな本屋を訪れた際、『わたしからはじまる
悲しみを物語るということ』という本が目をついた。新聞
でもアマゾンでも見たことのない本だった。著者の入江杏
という名も初めて目にする。店主にどんな著者が質問する
と、世田谷一家殺人事件の当事者で、それを機にグリーン
ケアの世界に入ってしまった人だという。「万人向けの本で
はない」という店主の言葉も心に残った。同じ著者の、『悲
しみとともにどう生きるか』という新書も紹介していた
いた。

ケア(とセラピー)にはここ何年か関心を持ってきたが、
その延長でグリーンフケアの本に出会うのは必然だったのか
もしれない。グリーンフケアについては詳しいことは知らず、
どちらかと言えば特殊な領域だと感じる部分もあった。(僕
が知る限り、野の花診療所が「小さななすな会」でグリー
フケアを展開されている。)しかし、グリーンフケアは特殊

なケアではないということが二冊を読んでよく分かった。
グリーンフケアとは「喪失にともなう悲嘆のこと」であり、グリー
フケアとは「悲しみの治療法や特別な処方箋ではなく、ケ
アのまなぎしで日常を捉え直すこと」であると著者は言う。

二〇〇〇年の大晦日に起こった世田谷一家殺人事件で
は家族四人の方が亡くなり、未だに未解決事件である。当
時、その隣に住んでいた著者、入江杏さんは犯罪被害者遺
族というステイグマ(＝負の烙印)に捉われることになる。
そのステイグマに向き合い、悲しみを語り、自己を更新し
ていくプロセス、大まかに言えばそれが『わたしからはじ
まる』の内容である。ステイグマに向き合う大きなきつか
けとなったのは入江さんの母の存在。入江さんの母は事件
の第一発見者でもある。入江さんは事件の何年か後、その
母と精神的に訣別する。訣別することで語りにも拓かれてい
く。また、事件後も支えであった夫を病で突然失う。

第一章は「沈黙とステイグマ」。悲しみの体験をすぐに
語ることが出来る人は幸運である。語る相手がいること、
語るために自分の中に足枷となるものがないことなど、様々
な条件が揃ってこそ語り始めることができる。入江さんは
事件から六年経って初めて、自分が事件の遺族であること
を言えるようになった。沈黙を強いていたもの、それは犯
罪被害者遺族というステレオタイプと、恥の意識だった。

恥の意識は母の価値観を無意識のうちに内面化したものであり、その意識を捨て去るためにも母と訣別せねばならなかった。この章では熊谷晋一郎との出会いも書かれているが、多くの出会いの中でもそれが一際重要だったようだ。

熊谷と言えば、『つながりの作法』である。つながらない身体(綾屋紗月)とつながりすぎる身体(熊谷)を通して当事者研究へと道が拓かれていくが、『わたしからはじまる』は入江さん自身による当事者研究の実録そのものであるとも言える。熊谷によれば、つながりの作法は大きく四つにまとめられている。

①世界や自己のイメージを共有すること

②実験的日常を共有すること

③暫定的な「等身大の自分」を共有すること

④「二重性と偶然性」で共感すること

これら四つのは全て『わたしからはじまる』の内容に入江さんの実践に当てはまる。例えば、①について、「多数派の世界では「ないこと」になっている現象に対して、新しい言葉や概念を作ることを通して、仲間と世界を共有する。そして、そういった世界の共有だけで解決することはい多いのだからことに気づかされていく。」仲間やメディアは「犯罪被害者遺族」というステレオタイプを生産/消費し、そこから外れた言動に対してはないことにするか、

激しくバッシングを浴びせる。一方、グリーンフェアでは喪失を体験した者同士が語り、聴く。語りたくなければ語らず、語りたくなったら語る。聴く方もただ聴き、受け止める。講評や批判は存在しない。そして、つながりの作法において、正解はない。なぜなら回復とは、ある地点に到達することではなく、変化し続ける過程そのものであり、回復とは回復しつづけることであるからだ。その点、入江さんも出会いを通して自分を「改訂」し続ける。

犯罪被害者遺族という個別性を超えて、広くグリーンフェアに道が拓かれていった点も見逃せない。喪失とは身内のことだけでなく、人間関係、学校、仕事、環境、所有物、病、身体の一部、目標、計画などをめぐって生じる、さまざまな日常の体験とされる。入江さんの主宰する「ミシユカの森」はまさに、事件とは関係のない人にも開かれたグリーンフェアの場となっている。また、事件や事故といった出来事そのものに固執するが目的ではなく、悲しみへの向き合い、悲しみの意味を考えること、そして、その悲しみとともにどう生きるかが問となっている。その問の底には、「悲しみから目を背けようとする社会は、実は生きること

を大切にしていない社会なのではないでしょうか」という入江さんの実感が横たわっている。

弱さの再構築

↳ 地べた目線のススメ

芝野 浩貴 (地球探検家)

ブレイディみかこ初の小説「両手にトカレフ」を読んだ。私はそんなに小説は読まないのだが、知人のSS(スクール・ソーシャル・ワーカー)に勧められて。イギリスが舞台で日本よりはSSが子供たちの生活の近くにいることは伝わるが、SSのことをよく書かれているわけではなかった。「生きづらさを抱えた人たちとどう関わればいいのか」国民的映画「男はつらいよ」で長年寅さんの妹のさくらを演じた倍賞千恵子が、75歳を過ぎたら△死▽を選ぶ事ができる設定映画「PLANTS」に出演した。演技に関しての倍賞のコメントが鋭い。「身体で表現するというのは、身体が嘘ついたら違う意味になってしまう」ブレイディみかこのノンフィクション本は何冊か読んでおり、映画「フルモンティ」や「わたしは、ダニエル・ブレイク」を思い出したりしたことはある。PLANTSは仮想といえども、歴史的には命の選別ともいえるヒトラーの「工作戦(安楽死)」は史実であり、相模原事件や政治家の「生産性がない」発言は事実である。

有名人のドキュメンタリーにも興味はないが、「瀬戸内寂聴99年生きて思うこと」は鑑賞した。最後の秘書「瀬尾まなほ」さんが身近にいることは知っていたが、17年間もカメラを回し続けて家族のように取材していた中村裕監督の存在を知らなかったからだ。瀬戸内寂聴が自らを曝け出して泣いたり、最後まで自分の足で立とうとする姿を撮影できた事の意味を知る。私が読む本を選択したり、観る映画を決める時に、確固たる基準がないことを思いながらも何故「両手にトカレフ」を熟読したのか…考える私が金子文子の存在を知ったのは、瀬戸内寂聴の本からではない。「金子文子と朴烈」は観た。瀬戸内寂聴を尊敬していたブレイディみかこは岡本かの子でなく、伊藤野枝でなく、金子文子を小説の中で蘇らせた。どうしようもない母親の元で弟を守りたい、行き場のない14歳のヒロイン「ミア」は金子文子に同化するしかなかった。日本を侵食しつつあるヤングケアラーやDV問題が「虚構」という名を借りた真実「の中に同化していた。(70号へ)

私が若い時は、先輩教員の言うことは聞かなかった。

T先生:「部活ばかりしても、手当は出ないし、勤務時間を消費するだけで損するだけなのでしないほうがいいよ」私の心の声:「部活だからとか授業だからとかの名目で指導しているわけではない。勤務時間も関係なく、目の前の

生命と共にしてただけだ。損得勘定で生きてるのか……)

D先生:「あの生徒には散々指導したけど不登校のまま、学校復帰は難しいのでもう関わらなくていい、時間の無駄になるから」

私の心の声:(それはあなたの価値観でしょう。学校に来させるのが目的ではない。私が担任になったからには、新しい生徒も原級留置や不登校の生徒も全部関わる。教員の仕事は面談だ)

Y先生:「生徒指導を職員室でやるのをやめてくれ。先生方からうるさくて仕事ができないと苦情が出ている。個室でやってくれ」

私の心の声:(どうしてもマンツーマンで話さなければならぬことはない。しかし、子供たちが周りの目を気にせず、ぼつりぼつりと自らを語るような雰囲気をつくるのが大事で、そこに至る守秘義務の見極めと信頼関係がある。指示ばかりで問題の背景を見ようとする作業は仕事ではない。職員室も教育をする場である)

それから、30年以上経ち、不登校生徒や鬱の先生が増え、年齢問わずに自死者も増加している。ストレスの増大なのか、生来の資質なのか、教員の児童・生徒に対するセクハラ・パワハラも閉ざされた空間での指導で増大し、文科省も個室指導に関する通達もしている。(私は過去を懐

かしんで外から感想述べているのではない。この文が読まれる頃、冒頭のSSMさんとコラボしながら、とある学校の先生方・保護者・生徒さんと弱さの再構築¹⁷について話し合っているだろう)

2022年8月8日精神科医中井久夫が逝去した。

「戦争は語りやすく、平和は人を引きつける物語になりにくい」

「医師が治せる患者は少なくとも、看護できない患者はいない」

いずれも中井氏の言葉である。中井氏の弟子筋の星野弘先生に学ばれてきた横田泉さん(61号)の言葉で追悼したい。心病む人に囲まれた人の灯りになればと思う。

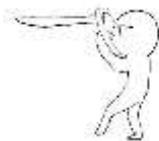
「苦しみを癒すことよりも、それを理解することよりも前に、苦しみがそこにある、ということに、われわれは気がつかなくてはならない。この問いには声がない。それは発する場をもたない。それは隣人としてその人の傍らに佇んだとき、はじめて感じられるものなのだ。自分の安心のための言葉は自制しなければならぬ。そばに佇み、耳を傾ける人がいて、はじめてその問いは語りうるものとして開かれてくる。これを私は「臨床の語り」と呼ぼう。」

*安克昌の臨床作法(日本評論社・統合失調症のひろば編)より

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示





太極拳教室（会場 定有堂二階）葉香クラブ（荷葉）
毎週 水曜 十九時半から ・ 土曜 十三時半から
講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

だんだんばなし

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

前回、「わらしべ長者」や「しあわせハンス」のように、鎖の輪の如くつながっていくお話を形容する言葉のありやなしや、と書いた。

放っておけばいいようなものだが、どうも性分で、気になつて仕様がな。少しばかり、ついついてみることにした。

和田信二郎の『巧智文學』（明治書院、一九五〇）は目を通していたのだが、詩歌主体のため物語文学への言及はない。和歌のアクロバット「文字鎖」などの事例はあるのですがね。

次に参照すべきは、綿谷雪の『言語遊戯の系譜』（青蛙房、一九七六）である。元本『言語遊戯考』は一九二七年の刊行で、これに多くの事例を増補して決定版としたものだ。

「尻取唄」には「乃木さんが」がちゃんと載っているではないか。日露戦争後、下関で始まり、日本中に広まったとある。ちなみに、最後の文句が、冒頭の文句に繋がるタイプを「尾頭循環型」と称するそうだ。抜群のネーミング・センスである。

さて、同書の「尻取り文句の変遷」の中に、「段々話」という項目がある。見本として「鼠の嫁入」「猫の名」などが例示されている。

「民俗学の方面で称する名目」云々とあるので、戦前戦後の民俗学事典の類を調べてみたが、これが妙々しくない。民話や世間話に関する立項が極端に少ないのだ。民話全集の類いは山程出ているのに比して、語りのスタイルや形式への関心はあまり高くないようだ。

では、方向を変えて、童話や童謡方面はどうか。

童話の主題を類型化した研究書はあるが、語りや手法を論じたものは見当たらない。雑誌など、丹念に当たれば或いは、とも思うが、この分野は明治大正から多くの種類が出ていて、とても一冊一冊ひっくり返す根気はない。

たったひとつ、古い大学紀要に、長尾素枝の「段々話

(國學院雜誌三十卷十一号、一九二四)があつた。

これがなかなかの拾い物で、簡にして要、委細を尽くした優れたものであつた。

長尾は、この名称の命名者は、「童話研究」の高木敏雄と推定、出典はジエームズ・ハリエルの「英国童謡童話集」であろう、と論じている。

なお、長尾素枝は長尾豊の別名。他に、尾島満、越原富雄の筆名を持つ。戦前の児童文学者で、子供向けの童話集の類を多数編纂している。演劇畑出身ということで、児童文学における、言葉や語りについて思う所があつたのだろう。

高木の『童話研究』(婦人文庫刊行会、一九一六)に当たると、ほとんど巻末に近い所で、式亭三馬の『浮世床』(猫の名)と印度の「パンチャタントラ」(鼠の嫁入)の例を引きながら、「此の話のやうに、甲から乙、乙から丙と段々に順を追うて、同じやうなことを續けてゆくのは、童話に好んで用ひられる形式で、(略)説話全篇が此の形式で出来てゐるのを、段々話と名づけるのであるが」云々と述べている。

ここまで来たら、毒喰らわば皿まで、高木が依拠したと

思われるハリエル某を調べねばなるまい。

ウィキペディアで、正しくは、ジエームズ・オーチャー・ド・ハリエル・フィリップスであることを確認。十九世紀の文学者(かなり病的なビプリオクラストでもあつたようだ)で、シエークスピア研究のほか、童謡の収集・研究を行った人物である。著書の中に *Nursery Rhymes of England*、*It is* があり、どうやらこれが長尾論文にある「英国童謡童話集」のことらしい。

挿絵入りのペーパーバックほか数種類が現在でも入手可能であつたが、ここはネット上に全文が公開されている第五版(一八八六)を参照する。

目次の第十六項に *Accumulative Stories* というのがあり、「王様の庭の鍵」や「ジョン・ポールが射ち尽くした」、「これはジャックが建てた家」などの童謡が例示されている。

どうやら、この *Accumulative Stories* の訳語として考えられたのが「段々話」という言葉であるようだ。やれやれ。

鳥取あれこれ その七十四

内田 克彦（地域研究家）

先日、「日本の学校の創立者」である鳥取出身者たちの一人として、山本藤助を取り上げて話をした。彼は、大阪にある帝塚山学院の創立者の一人である。ところが、経歴を調べてもいろいろ不明な記述があった。

山本藤助は、一八七四（明治七）年六月一日に、現在の鳥取市寺町で、鳥取士族の「山田頼實」の長男の「山田實」として生まれた。一九三〇年刊の『鳥取縣人名鑑』では「川田頼實」とするものの、その記述をもとに書かれた『鳥取県大百科事典』の「山本藤助」の項では、「山田頼実」としている。一方、『鳥取県人物・人材情報リスト2021』では、「旧姓・旧名」欄に「川田実」とある。篠村昭二著『鳥取県教育百年史余話 下』では、追憶録の『藤蔭余影』によって「山田頼実の長男」としているの、旧姓名は「山田実」なのだろう。

『人名鑑』では続いて、一八八一（明治一四）年修徳小学校に入学し、卒業後育英高等小学校にすゝみ傍ら漢文英文語数学等を修めた」とある。「修徳小学校」は、のち

に修立尋常小学校となるが、「育英高等小学校」とはどこのかわからない。四年で修徳小学校を終えたとする、一八八五（明治一八）年に高等小学校に進むことになるが、「鳥取高等科小学校」の開校はその年の一〇月一六日のことである。篠村著では「高等小学校に進んだものらしく」と書き、校名を明らかにしていない。

続いて「十八歳のとき笈（きゆう）を負ふて京都に上り、京都府立第一商業学校に入学し、二十八年卒業する」とある。ネット上で調べると、一八八六（明治一九）年に開設の「京都府商業学校」が一九一〇（明治四三）年に「京都市立第一商業学校」と改称した、とあるため、恐らくこの学校のことであろう。

さらに「卒業するや東京帝国海上保険会社に入社し、後大阪支店に転じ」とある。篠村著では「東京帝国海上運送火災保険会社」とするが、一八九五（明治二八）年段階では「帝国海上保険会社」である。「まめくしく働いて居るうち、三十五年初代山本藤助氏未亡人に懇望されてその女婿となり、二代目山本藤助を襲名」する。初代山本藤助は前年の一九〇一（明治三四）年に亡くなっており、翌年に初代の長女としての夫として山本家に入ったのである。

一九一四（大正三）年に第一次大戦が勃発する。家業である鉄材卸売業と海運業で巨利を得る。「一躍二千万円の巨資を積んだ」とあり、一九一五（大正四）年一月『人事興信録 第4版』に「直接国税千四百余円を納む」とある。

そして、一九一六（大正五）年一二月に、財団法人帝塚山学院の設立認可を得て、翌年四月に「帝塚山学院小学校」が開校、一九一八（大正七）年五月には「帝塚山学院幼稚園」が開園、一九二〇（大正九）年一月に理事長に就く。

篠村著に、鳥取高等農産学校について次の記述がある。

高農の位置が鳥取市ときまった大正七年五月、山本藤助は鳥取市に帰った。そして、母親の八十歳の祝賀会を、市内の八百竹楼で開くことにした。〔略〕山本藤助は、この席上で十萬円の寄附をしたいと言った。

一九七九年刊の『久遠の命培ひて』によれば、地元負担金六六万四五百円のうち四割の二六万四五百円を県負担、残りの六割四〇万円を個人の寄附に仰ぐことになった。「四十万円はざっと二十億円近い額に相当する」のである。この四〇万円は、県外在住の本県出身者に一六万円、地元鳥取市に一三万円、残り一十一万円を郡部に割り当てられた。こ

の鳥取市への割当一三万円の大部分が山本藤助によって賄われたのである。なお、県史ブックレット11『褒められた人びと』によれば、山本藤助は元知事宛に「いまだ礼状すらない」との不満の書状を送っている。何故そんなことになったのかよくわからない。

山本は一九二〇（大正九）年五月の衆議院議員選挙に鳥取市から推されて当選する（『鳥取県史 近代第四卷社会篇』では「金権候補」と書く）。「特に財政方面に貢献する所多く就中千代川改修工事の清〔ママ〕願採択に尽力したのは忘るべからざる功績であらう」とある。また、一九二一（大正一〇）年四月発行の『因伯及因伯人』には「山本代議士 次期以後に至れば随分面白い仕事をやる可能性のある人である」と書かれている。ところが「〔同年〕六月軽微なる脳溢血を発し爾來療養に力めたが、大正十五年八月病再発し同十六日遂に白王樓中の人となった」。

一九二六（大正一五）年四月「帝塚山高専女学校」が仮校舎で開校する。同年七月一八日鉄筋校舎の定礎式に出席し、自ら書いた定礎の二文字を埋め込み、間もなく郷里鳥取を訪れ、さらに有馬別邸で静養中であつたが、その完成の日を待たず、逝去した。享年五二歳。

山本藤助は『鳥取市人物誌きらめく120人』『鳥取県百傑傳』にも載っていない。 二〇二二・九・二〇

八代日記

(三十一)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店)

九月某日

気になつてゐるがまだ買つていない本、『ヴァイナルの時代 21世紀のレコード収集術とその哲学』マックス・ブレンジンスキー著、坂本麻里子訳、エレキングブックス。長いけれど本文の引用。

「ヴァイナル・レコードは魔法の商品だ。銅やコーヒーのように日々売り買いされるにも関わらず、レコードの真価は常に現金価格を上回る。現在のヴァイナルの収集家はこれまで以上に、自らの所有するレコードに対し深くスピリチュアルな、知的な、エモーショナルな意味合いを付与している。ヴァイナルを愛する者の心と精神の中において、一枚のレコードは決して単なる「引つ掴み、引つくり返す」ための「ちよつとした名も無きオブジェ」ではない。むしろ、レコードはアルバート・アインラーが「宇宙を癒すフォー」ス」と呼んだものを内に宿す存在だ。」

まさしくこんな物体は現在ではほんとうに希少ではある。身もふたもないけれど、金持ちになつてレコード買いまくりたい。見境のない欲望。身もふたもないので普段は抑圧して忘れるようにしている。ただ他のことのために金持ちになりたいと思つたことはあんまりないかも。

先日、「紙にインクが滲んでいること」の素晴らしさを考えていただけで涙が出そうになつて満ち足りてしまい、人間はなぜよその領土を欲しがつたりオリンピックを招致したりしたくなるのか、欲望の果てしなさはしたなげさよ。とか思つていたけれど、結局欲望がどちらに向くのかという問題なのでたいして自分も変わりはないのだろう。つまり欲望の矛先や成就の方法が問題なのか。

九月某日

これまでに経験のないような台風がやってくることで九月十八日と十九日は休業することにしてしたが、弊社のある八代の西側はさほどひどい風雨にならず、ほとんど何の被害もなかったため、十九日の午後は店を開けることにした。自分は自宅待機していたが待機に飽きてきてむしろにケーキが食べたい午後だったので、きつとそういうお客様もいるだろうとの読み。

3連休の半分が開店できなかったため数字としては厳

しかったが安全第一。これまでに経験のないようなことが毎年続くようになるのだろうか。年に一度はそういうものがやってくるといふ心構えと物理的な準備はしていた方がいいだろう。

九月某日

同時に複数のいいことが起きたりしたとき、自分もそうだけれど僕の妻も何だか後ろめたくなる、もしくはもうこれ以上楽しんではいけない気分になると言っていた。幸せだと思ふ状態に後ろめたさを感じるマインドがセツティングされているのはなぜだろう。

曖昧な印象だけれども、小学校とか中学校の道徳教育にその一因があるんじゃないだろうかと思ってしまう。もしくは学校の教育方針全般。確かに自分だけではなく、万人が平等に幸せな状態になるべきではある。しかしそこで個々の幸せな感じに後ろめたさを植え付けるのはどうも身分制度とか階級制度に基づいている気がしてしまう。そういうのを享受できるには資格が要るとも言うように。この植え付けられたといふ感覚がただの被害妄想かもしれないが、自分がハッピーになつたら周りもハッピーにしていこう、というのが庶民の感覚には大事なはず。パーティーを続けていこうというのはそういうことのはず。どうも会社社員社

会にもその感覚がないのが経済停滞の原因なんじゃないの。構造というよりもマインドの改革の方が日本社会に必要なんでないかい。

九月某日

仕事と育児にかまけて練習に行けない。今月は東京行きを断念した。だんだんこうして音楽活動をフェイドアウトしてしまうことがあるのだろうかという実感だが、やめないうぞー。下手の横好き。悪好きにならないように。

とか言いながら活動しないための言い訳をこねくり回しているだけでは。ほんとはやめたいのか？ただのポーズ？初期衝動をかえりみて自問せねばならない。

今自問しました。まだ続けたいです。

九月某日

『季刊リユニエール』の揃いがそれなりに手頃な値段で出たので買ってしまった。買ってしまったが家の棚をみたらもうだいたいぶん揃えてしまっていたのでかえって高くついてしまった。重複分は汽水社に持っていこう。

蝶々夫人と下駄

秦阜 梅林

(楽人)

序

先頃亡くなった森英恵さんが嘗てNYメトロポリタン歌劇場でご覧になった「蝶々夫人」で「夫人が下駄履きで座敷の上を走り廻る…、日本人として屈辱を受けた」と仰つてゐた、「文化誤認、酷い演出」とも。

時代が降り80年代僕らがヴィーンで観たそれ、そしてHVカラヤン演出の映画版も50歩100歩だった。

東京に留学経験も有る台湾出身のL某等もやはり憤懣やるかたなかつたので、ミラノ・スカラ座の浅利慶太演出朝倉摂美術、森英恵衣装他主要スタッフを邦人の占める新演出版プレミエTV中継を観乍ら「かうでなくちゃー！」多分に溜飲を下げた由、その足で実演を確かむるべくミラノへ！僕も勢ひにすっかり呑み込まれ、翌晩には歌劇場のシートに座つてゐた。

成る程、森英恵、浅利組の其れは「如何にも洗練された、都会風で」日本人の鑑賞に充分耐へられる「純和風な」間違への無ひ舞台、此れ迄のチンケなものとは一味違つて居た…其の点では本格的、然し僕の感心したのはG・ナヴァツラ指揮の、何処を切つても血の紫吹跳び散るやうな繊細で叙情的、直接語りかけてくる美しひオーケストラ、J・レヴァイン等が聴かせる、アメリカンで如何にも大味、ケチャップのタップリかかった手垢塗れの其れとは違ひ、息遣ひの聞こへてくるやうな「楽による長崎」の悲劇だった

口

本題に戻らう。然し僕は此の「三島ばりに人工的に自然な」演出、その洗練に違和感を感じたのだ、プッチーニのジャポニズムは斯くの如き…？いや、彼は…日本文化には稚拙な憧れしか持たず、其れはお伽話、ファンタジーとしてキツチュな夢物語だった筈…勿論、デザイナ、美術家として舞台上に携はり参加しておられる女史と僕ではまるで違ふ視点から物語を見上げており、文字通り観点、拘りの箇所、求める点がるで違つて構はなひ。ただ此の演

出は、本場の東洋人が観て違和感の無ひ文化様式に余り偏って居て、「作曲家の引き込まれた夢の世界の出来事」、さうまるで「アリスの見た夢の中のやうな！非条理」はいったひ何処に抜け落ちて了ったのだらう？！

目

抑、生活の中の作法が「型通り踏まれてゐる」に越したことは無ひけれど、そこは、さうして其の重箱の隅は？、突っ込み所、余程大事な拘りの所であらうか！

だったら？ 邦画の巨匠作品の中でもし？西欧人がナポリタンを箸でチュルチュル音をたて啜り始めたら？ 伊人は激怒しなきやならなひ寸法？ そんな道理であらうか？ 主人公達の深層心理表現、夫人の命を賭け、夢破れ死を覚悟しての最期の絶唱よりも？！

作者が何に感動し、何を訴へ、命を賭けた絶唱を考へる時、「シンデレーラの硝子の靴、トスカのナイフ」にも匹敵するアイテムにだったのだらうか？「観るオペラ」では演出上、時々此のやうな混淆が起きて了んことがあり得る。其処を「演出」と云ひ乍ら、途方も無ひ安直な摺り替への行はれて了ふ瞬間が：歌や音楽、芝居よりも大事な下駄や草履、首飾りの生まれて了ふ…。

今回の一枚

『プッチーニ「蝶々夫人」

- ①『パタネ指揮M.キアラ、J.キング、F.シユミット、H.プライ他バイエルン放送合唱団他（ミュンヒェン rec1972）
- ②J.バルビローリ指揮R.スコットA.マスタースイ他（ローマ歌劇場 rec1966.）
- ③D.ミトロポウロス指揮D.キルステン、F.フェルナンディ他（メトロポリタン歌劇場ライブ1966. 04.16NY）



（イラスト・秦阜梅林）

迷える人、ひとり

三浦 永理

(青翔開智中学校教員)

「では、まず幸せな自分の姿を想像してみてください」と瞑想ガイドランスの動画が私に話してくる。

「幸せな姿」？ そんなの考える余力がないから、今ポチッと動画の再生ボタンを押したのに、空気読んでくれよと、瞑想する気を失った。

二十七歳。完全に迷走中である。

人より幸せに対するセンスがない。楽しすぎたり、幸せすぎたりするタイミングで私が考えていることは、「これはいつか終わってしまうんだな」ということ。楽しかった遠足も帰ってしまえば、魔法が解ける。夢みたくないバランスで成り立っていた人間関係もふとしたことでギクシヤクする。うまく回らなくなる。ああ、ここも安住の地ではなかったのだなど、次の場所に向かう。そんな生き方を四半世紀繰り返している。

そういう無責任な遊牧民のような生き方、そんなノスタ

ルジックな言い方を避けるのであれば、そういう都会的な責任放棄した生き方は、私のスタイルだった。消費者的で、生産者的な生き方ではない。

私は土地や居場所に対する覚悟がない人間だと思いつらされる。うまくいかなければ次に行けばいいよ、消耗しているくらいなら、とそうやって生きてきた。

一方で、場を作る側、新しいことを生み出す側の視点を持ち始めると、地縁や周囲の地域の人と「一緒に」コミュニケーションを作る、居場所を作る覚悟がなければ、面白いことはできない気がしてならない。自分が少し大人になったから、視点が変わったのかもしれない。

ほんの少し前なら、「幸せな姿」と聞いてもう少しナイーブな気持ちで想像ができた。

結婚していたり、海外で暮らしていたり、日当たりのいい場所で本を読んでいた、子育てしていたり…。

今は難しく考えすぎしてしまう。

「結婚したいって結婚式したいだけじゃない？」

「海外で暮らすって、どうやって働くの？」

「大きな庭なんて持ったら、その整備は誰がするの？」

そんなディテールのお話をあの動画は求めてこないだろうけれども、今の私はそこまで妄想しないと気が済まな

くなっているところがある。いずれにせよ、かつて妄想していた「幸せ」は誰かのお仕着せになっているような気がして、自分のものだとは高らかに言えない。

私だけの「幸せ」って何なのだろう。

一方で、果たしてそんな純粹無垢の「幸せ」ってあるのだろうか。文化的な文脈も、時代的な流れも、全て引き受けた上でそれでも私が「幸せ」と呼ぶものは、意外と平凡なものかもしれない。

そして、それは一ミリも仕事とは関係ない気がする。自分の人生をかけてやっている仕事からは得られない人からの純粹な信頼。立場など気にしない親愛の情。気ままにぶらぶらして自由の空気を味わうこと。

そうだった、そうだった。私は、音楽を聴いて勝手に踊り出す側の人で、それを止める人ではなかった。小学一年生の頃、数字の練習帳にそれぞれの数字に顔を書き込むような人だった。祖母は額縁に入れて飾ってくれていた。これもまた小学生の時、家族で京都旅行をしたら、ホテルで弟がベランダの扉を勢いよく閉めたせいで、私だけ追い出された。その時、「小説のネタにしますから大丈夫です」

と謝る支配人さんに声をかけた。作家気取りだった。変な子で、妄想好きで、いつも心ここに在らずの人間だった。そんなポーツとしたい人間が、仕事となると人に指示を出したりする立場になる。これも、あれも気をつけましようね、などと私の口から出てくる。あなたいつからそんなまともに、とも思ってしまう。

役に立ちたいと思つて生きてきた。誰かの役に立てるために、私の思考と健康な体があつて、これを犠牲にして、誰かが助かるならそれで本望だ。おそらく、これは人々の罪のために磔刑となつたキリストについて語るカトリック教育が、私に影響しているのかもしれない。

でも、もう役に立とうとするのは疲れてしまったな、と思つた。役に立つために、無理をしても仕事をしたり、真つ当な人のふりをしたりするのは、「私らしき」を、私の感性を失う作業だった。

妄想し続けたまま、踊り続ける。そんな人間のまま。迷いながら生き続けることの方が、本当の「幸せ」かもしれない。自分の感性を磨くのを忘れたら、人生終わり。研いだはずのものを書き留めて。

そして、私をこの世につなぎとめて。

鮭

あきの素生

(くうねるめがね)



最近、鮭のスープにはまっている。自分で作る汁物に魚を入れるのはあまりなじみがなく、ごくごくまれに作るあら汁くらい。それにしたって、あらを焼いてからかかると重ぶりで。適切に下処理できる自信がなく、生臭くなることを恐れている。件のスープは、きのこや青菜、ミニトマトを入れて、しょうゆ、みりん、レモン汁等で味付けするシンプルなものだが、ひと口食べて、その旨さに驚いた。生臭さはまったくなく、どれかひとつの調味料や具材が味を決定づけているわけでもなく、ほどよく調和して、旨さを醸しているといった具合だ。こういうレシピに出会うとうれしくなる。これから何度も作る料理になる予感がある。

そんなこんなで、ちょうど秋だし、鮭について書くことと
思ったら、鮭にもいろいろあるようだった。

鮭、サーモン、アトランティックサーモン、サーモントラウト(トラウトサーモン)、そういえば見たことも聞いたこともあるが、違いを意識したことはなかった。曰く「鮭」は天然、「サーモン」は養殖で使われることがほとんど、日本で「鮭」といえばシロザケ、アトランティックサーモンはタイセイヨウサケでサーモントラウトはニジマス、ちなみに「境港サーモン」は銀ザケ、サケとマスの違いについてはいろいろ言われつつも大して違いはないと言う向きもあり、複雑で混乱していて、読んでいるうちに自分も混乱してきた。ので、あまり深く考えず、書くことにする。

刺身は「鮭」より「サーモン」の方がなじむ。わさびじょうゆとほん酢、どちらで食べるのも好きだ。千切りの玉ねぎ、にんじんと一緒に、昆布だし入りの酢に漬けるのもいい。ほとんど養殖だからだろうが、味が安定していて年中手に入れることができ、寿司ネタとしてもバリエーションがある。脂がのって、親しみやすい味だから、子どもの頃から好き嫌いせずずっと食べている。一番たくさん生食してきた魚かもしれない。

焼いた鮭は、皮まで食べる派だ。箸でほぐしながらご飯
といただく以外にも、ほぐした身をおむすびの具に、マ

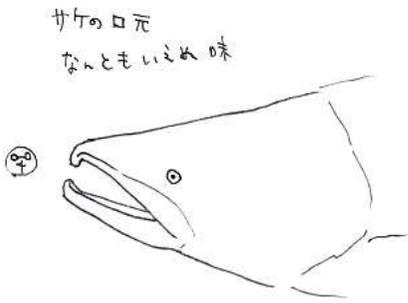
ヨネーズを混ぜて、ツナマヨならぬ鮭マヨに、白ごまと酢飯に混ぜ込み、青じその千切りをのせた簡単ちらし寿司に、と、山育ちである自分にも気楽に扱える魚だな、と思う。ホイル焼きにすることも多い。玉ねぎ、にんじん、えのきも入れて、料理酒を少々。アルミホイルで包んで、火にかけて放っておくだけで野菜も取れる一品になるなんて、いうことなした。身の色が華やかなので、弁当づくりにも重宝する。サーモンピンクはピンクより好きだ。誰かに見せながら食べるわけでもないが、彩りよく弁当を作ることができる、なんだか達成感がある。

かつて、多少の起伏はあっても、どこまでも広がる地面を踏みしめて歩いていると思っていたら、実は綱渡りをしているんじゃないか、と気づいた(ように感じた)時期があった。地面は意味みたいなもので、確固たる何かの上にいることを疑いもせずにしたのだが、あれ、確固たる何か、なくない?と唐突に思ってしまったのだ。以前のように何も考えずに歩いたり走ったりしたいのにとふてくされ、戸惑い、でもものぐさだから面倒くさくなり、とまあ混乱していた。大人になるための通過儀礼といえはそうなのだろうし、大人になったら何であんなことに悩んでたのかなと思うようになるよとアドバイスをくれる身近な大人もいた

が、それには自分で納得することが必要だった。納得させてくれたのは鮭だった。鮭は、川で生まれて海を旅し、川に帰って産卵したところで生涯を終える、といういつの頃からか聞き知った正確ではないかもしれない知識が、ふと頭に浮かんだ。種の存続という意味はあるとして、それが「確固たる何か」足りえるかといえはそうではない。でも、鮭はそこに在る。「確固たる何か」とはかわりなく、ただ在るだけでいいのではないか、と確かそんなことを考えたのだ。嘘みたいだが、それがすとんと腑に落ちて、混乱は終息した。

以来、鮭にはなんとなくささやかな感謝の念を抱いている。感謝しながら、おいしくいただく。

(イラスト あきの素生)



はなうたアンコール



ドラマメリア

(座敷わらし)

同じ部署の先輩Aさんは鼻歌が多い。普段隣室で作業をすることが多いわたしはあまり至近距離で聞かないが、ガラスを隔てた背後から「ラララ」と歌声が流れてくるので、ああ今ご機嫌タイムなのだ、と調子を推し量る。

隣の席で間近にそれを聞く物静かな先輩Bさんはわからないが、わたしはAさんの歌が結構好きだ。ハミングしたり軽く口ずさんだりするのではなく、高らかにラララとうたい上げるそのスタイルは堂々としていっそ好ましい。それにお付き合ひも三年目ともなれば、頻繁な鼻歌ももはや気にならないを通り越して環境音に近くなってくるというものだ。

一方わたし自身はといえば、残念ながら筋金入りの音痴だ。二親等以内の人びとは揃って調子はずれなので、きつと遺伝だろうと自分を慰めている。己が調子はずれであることはわきまえているので、わが家の人間は人前で歌を披露することを自らに固く禁じている。

そんなわたしからすると、歌声を大盤振る舞いされるAさんはうらやましいし、合唱部仕込みの美声は耳に心地よい。常々そう思っていたので、ある日雑談のついでに「Aさんの歌声綺麗ですよね」と告げると、Aさんは怪訝そうな様子で、

「え、ドラマメリアさんの前で歌ったことないよね」

「いやいや、いつも鼻歌を聞かせてもらってるじゃないですか」

……そう告げたときのAさんの愕然とした顔。その驚きようにむしろこちらが衝撃を受けた。あれだけ大っぴらに歌っていて、まさか無意識だったとは。

あれから五日。気にしているのか、Aさんはまだ歌わない。歌つてよAさん。あなたの歌声、素敵ですよ。



・編集後記… 今月の原稿を書いていて、「へーこの山が二つある記号を「庵点」（いおりてん）と呼ぶことを知りました。イオリテン！「へ」じゃないのね！

ドラマメリア（編集長）

店内限定ですが、今年も定有堂叢書No.12『誰ひとり取り残さないために』岩田直樹著を配布中。定有堂教室「読む会」選書人です。No.11の『ドラマメリア覚書』も好評です。奈良敏行（発行人）